

TAKE FREE

2M+

vol.
01

北海道教育大学岩見沢校 卒業生へのインタビュー



+
高校美術教員

太田 香

OOTAKA KAORI

Topics

- 美術を始めたきっかけ
- 画家としての原点
- 恩師との出会い
- 仕事と制作
- 北教大岩見沢から、その先へ

ZAWA+について

2020年より、新たに始まった i-BOX のシリーズ企画「ZAWA+」。本展では岩見沢(ZAWA) から飛び立った、卒業生のその後と現在(+)をご紹介します。岩見沢校が現在の芸術・スポーツを学ぶ大学に形を変えてから十年以上が経過しました。これまでに岩見沢の地を巣立った卒業生たちは、社会経験を積みながら近年、活躍の幅を広げつつあります。教員、会社員、クリエイター… 様々な進路に進んだ卒業生たちは、今一体何を考え、何を作っているのでしょうか？「ZAWA+」では、社会とかかわりながら、自らの作品を作り続ける卒業生の皆様をご紹介します。

vol.
01

+ 高校美術教員

太田
香
オオ
タ
カオリ

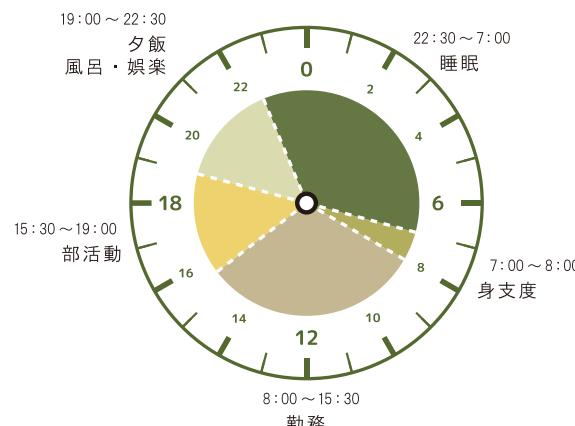
太田香26歳。北海道旭川市にて3人兄弟の末っ子として生まれる。小さい頃は家の前の公園で日が暮れるまで遊び続ける活発な子どもだった。幼少期から絵を描くことが好きで、家に帰つてからや雨で公園に行けない日はいつも絵を描いていた。当時は漫画の模写を主に描いていて、外で遊ぶことと同じくらい楽しかったという。中学校では美術部がなかったためテニス部に所属していた。中学3年生の時に家の近くの高校に美術指導で有名な先生が転入するという噂を聞きつけ進路先を決めた。高校の美術部では画家としても活動する顧問の先生に基礎から油彩画を教わった。高文連の全道大会にも入選しており、当時の作風は徹底した写実主義のものだった。高校卒業後も美術について学びたいという思いから岩見沢校に進学。油彩画研究室に所属し、道展(21)では北海道教育長賞を受賞した。写実主義から一転して大学時代には様々な作風に挑戦し続け、卒業制作「お遊戯」以降現在の作風に。大学卒業後は高校美術教員として勤務する傍ら、北海道教職員美術展で特選に入賞するなど制作活動も続けている。好きなものは睡眠、猫、東京の3。

オオタさんってどんな人?

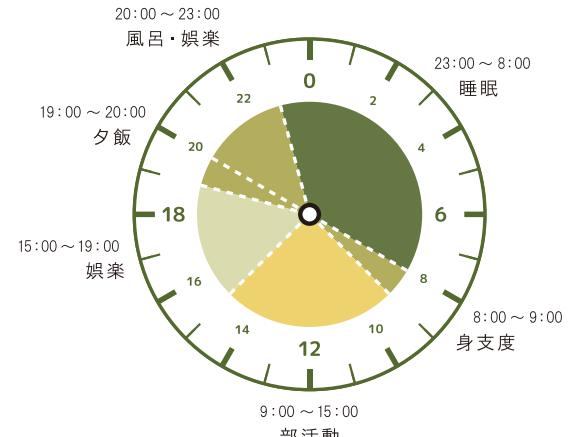
HITOTONARI SPACE

Q.1 | オオタさんの一日

【平日】



【休日】



Q.2 | オオタさんの5カジョウ

- + 生徒に高圧的な態度をとらない
- + 仕事は持ち帰らない
- + やらなきゃいけないことはなるべく早めに
- + 体調が悪いときはしっかり休む
- + 睡眠第一

Q.3 | 現在のお仕事



室蘭の高校で美術を教えています。

第48回北海道教職員美術展 特選「恍惚」
美術教員を勤めながら、制作活動を続けています。



※5.「いつか」F6



※4.「崖の女」27mm×29mm



※3.「戻る人たち」F100



※2.「互いに忘れないように」F80



※1.「ないしょ」F50

活発な少女、絵との出会い

一 幼い頃はどんな子どもでしたか。家の本当に目の前に大きい公園があつて、小さい頃は毎日そこで遊んでいました。ただ、家中で遊ぶのも好きで、そこで絵を描いたりしていました。といつても当然本格的なものではなくて、当時読んでいた漫画のキャラクターを真似して描くというようなものでした。

一 特に美術教室に通っていたわけではないということですね。

小学校ではピアノを習っていて、中学校ではテニス部に所属していました。絶対何かしらの部活動に入りなさいというルールがあって、その学校には美術部がなくて、という理由でのテニス部でした。

1人目の恩師

一 高校はどんな理由で進学を決めたのでしょうか。

高校も美術系に行きたいという思いは全然なくて、家に近いところでいいやという感じでした。学

一 舟岳先生との出会いによつてどんな変化があつたのでしょうか。

2年生の時に舟岳先生から、ゼミ課題として20枚下絵を描いてこいという指令が出されました。高校時代から温めてきたラフなどもあつてサクサクその課題は終わりそうだったんですが、どうしても残り一枚が思いつきませんでした。当時の私は高校時代から筋金入りの写実主義者^{*1}だったので、その最後の1枚だけは仕方なくひよひよと適当に書いた人間の絵を忍ばせました。震えながら当日のゼミが始まると、なんとその一枚^{*2}が先生に強烈に刺さつたらしく予想外の絶賛をされました。結果的にそういう「デフォルメ人間」をテーマに作品を描いてみたら?という方向に話が進んでいましたが、当時はかなり半信半

に戻つきました。そんなちょっとした経余曲折を経て、私の画家人生における2つ目の重要な出会いが発生します。

2人目の恩師

一 太田さんの心の闇を、舟岳先生は見抜いていたのかもしれませんね。

デフォルメ人間シリーズも年代によつて少しずつ変化していく、とにかく暗い時代^{*3}やあえて平面的なタッチを取り入れた時代^{*4}、民族衣装ブーム^{*5}などその時見たものや影響を受けたものを柔軟に取り入れていました。そんな中、制作をする上で「まじめにふまじ

たところで、美術で有名な先生が入学と同時にやつてくるらしいという噂を聞いて、「これはちょうどいいなと思いました。その先生はこれまでに数々の賞を獲つていて個展もやつたりするくらいの方で、専門は油彩画でした。中学までテニス部だった私は先生から初めて絵を描くということを学びました。この時に、技術についてはもちろんですが、制作に対する心構えなどを教わりました。色々と難しく考えてしまつて、神経質になつた時に、まずは楽しんで描くことを忘れないようになると、岩見沢校を受験しました。入学当初は就職活動を見越して、デザイン系のスキルを身につけたいと密かに目論んでいたのですが、1年生の時に受けたデザインの授業でやつぱり自分に向いていないなど判断して油彩画にあると思います。

そんな高校時代を過ごして、大学でもまた美術について学びたいという思いがあり岩見沢校を受験しました。入学当初は就職活動を見越して、デザイン系のスキルを身につけたいと密かに目論んでいたのですが、1年生の時に受けたデザインの授業でやつぱり自分に向いていないなど判断して油彩画



※7.「卒業式」

—教員としての経験が制作に活かされることはあるのでしょうか。生徒が考えていることはすごく面白いです。夜中にどうしても目が冴えてしまつて眠れない時の気持ちを絵にしたいとか、自分が死ぬ時の様子を表現するにはどうしたらいいかとか、自由な発想に自分もすごく刺激を受けます。生徒と関わることが制作にもつながり、実際に「卒業式」^{※7}という作品を描きました。高校を飛び立つていく教え子たちに向けて、大人になるにつれてもう守つてもらえないなくなるんだぞ、というメッセージが込められています。先生にならなかつたらまず描かなかつたであろう作品ですね。

らは少し成長して、今は全学年の美術科と美術部の顧問、また高校3年生のクラスの担任もやっています。当たり前ですが学生の頃と生活は大きく変わりました。絵ばかり描いていた頃が懐かしいですが、今の生活もすごく充実しています。

「め」というテーマは常に念頭においていました。よくよく見るとただの落書きじゃないかみたいなモノも、絵画作品として持たせるためにどんな工夫をしたらしいかと模索していました。その方法の一つとして、ある種の暗さや毒を私は用いていました。相反する要素が同居するアンバランスさに私は面白を感じています。

最近では小さな人間が遊んでいる絵ばかり描いていますが、この作風に落ち着いたのは卒業制作がきっかけです。絵を描くことを中止に過ごしてきた大学生活も残りました。自分の人生を振り返り、1年に迫り、集大成となる卒業^{※6}は何を描こうかと悩む日々が続きました。これまで影響を受けたものやすつと心に引っかかっているものを紐解いていくと、ふと実家の窓から見える公園のことを思い出しました。「自室から遊んでる子たちを見つめているように、私が遊んでる時もある窓の向こうから誰かが私を見つめている」。幼い日に抱いた違和感を、懐かしい遊具の裏に隠して閉じ込めました。2階か

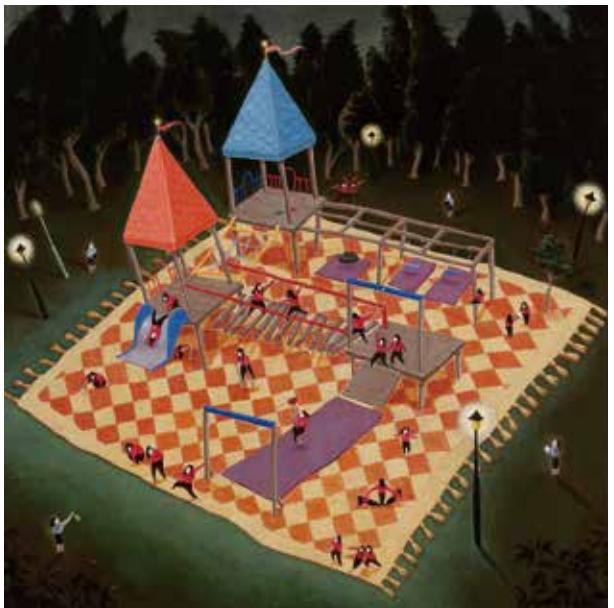
ー教員になると決めたのはどんなきっかけがあったからでしょうか。アルバイトは制作に支障が出ないように、土日が休みの飲食店と短期や単発のバイトを行い、ほとんど絵ばかり描いていた大学生でした。就職活動を始めたのはかなり遅かったと思います。何がしたいか、私には何ができるかを考えると、やはりずっと学んできた油彩画を活かしたいという思いがありました。そこでハツと高校時代の恩師のことを思い出しました。絵を教えながら、自分も学校の美術準備室をアトリエにして絵を描いていた。そうだ、先生を目指そう、と高校教員になることを決めました。

期限付きで入つてから2年目で本採用となり、5年目となる今年もずっと同じ高校で勤務しています。右も左もわからなかつた頃か



【編集担当者コメント】

1人1人のストーリーを考えながら見るのが面白い!
この子には一体何があったんでしょう…



※6.「お遊戯」 \$100

ら見た景色なので、絵の視点も上から見下ろすようになっているのがポイントです。

教え、教わる日々



ロゴについて

卒業したあとどんな仕事をしていても、生活をしていくとも、大学で学んだことや、大学の仲間たちと過ごした時間は生かされている。どんな経験も、この先の自分につながっていく、という意味を込めて、「ZAWA+」の文字を一筆書きのようにななげました。また”人生山あり谷あり”というイメージに合わせ、丸みを帯びたデザインにしました。

ZAWA+ vol.01 太田香「終わらない遊戯」

会期：2020年12月13日（日）～12月27日（日）

時間：10:00～12:00、13:00～16:00（※最終日は15時まで）

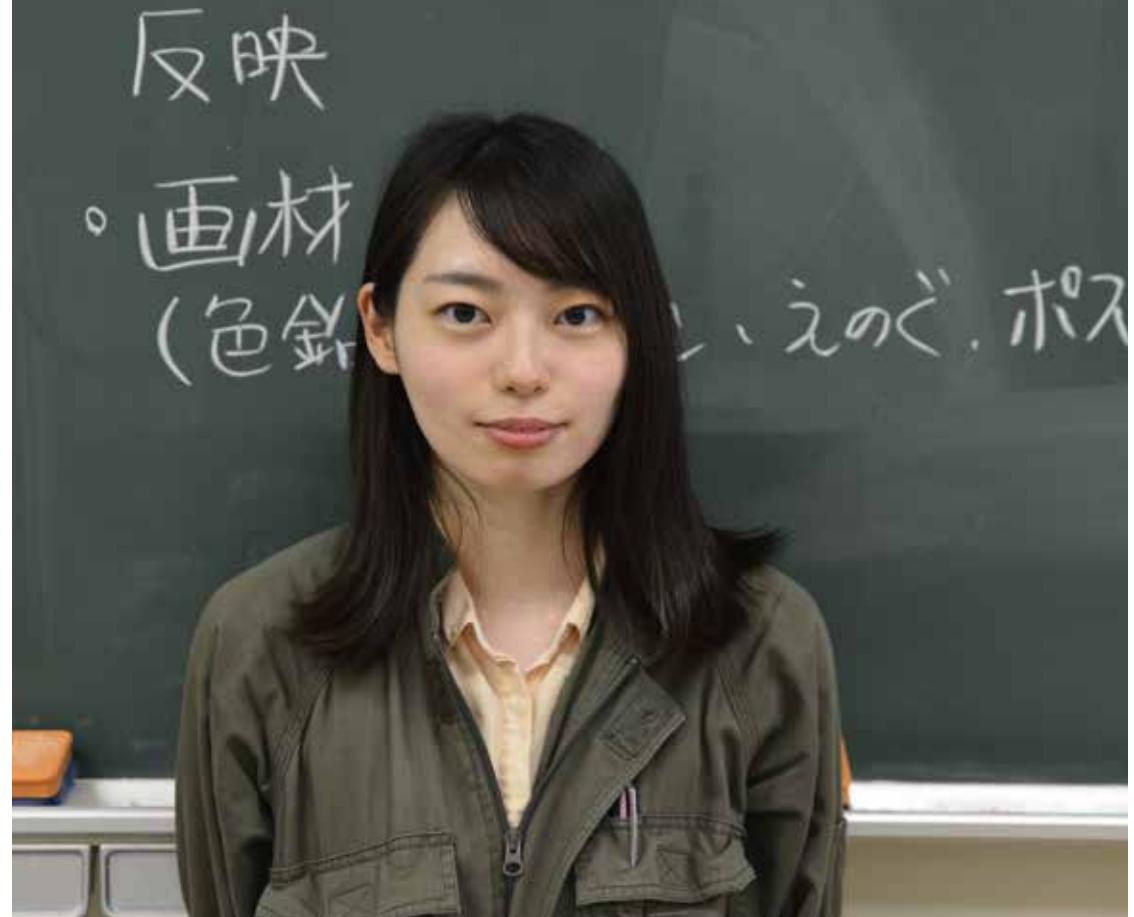
会場：北海道教育大学岩見沢校 BOX [i-BOX]

岩見沢市有明町南1番地1 JR岩見沢複合駅舎 有明交流プラザ2階

入場無料

企画：北海道教育大学岩見沢校 i-BOX

尾崎芳子 / 煤田真実 / 藤野留朱 / 吉川幸佑



大学で学んだこととして、まずは美術の知識や指導法ですね。やっぱり自分が知っていることしか教えられないでの、専門的に学んできることは授業や部活動に活きていると思います。加えて、船岳先生の指導スタイルもすごくお手本にしています。先生には制作についての悩みやそれ以外の話も、とにかく相談に乗ってもらっています。他人に言われて気付くこと、また、話しているうちに自分で整理されることなど、対話的重要性を学びました。教わる立場から教える立場になつて、私もまず生徒の考え方を聞くようにしています。

その子が表現したいものによって、私が授けるべき知識や技術というのが変わっていくと思うので、よく話を聞くというスタイルは絶対に忘れてはいけないなと思います。

「仕事と制作について、どのような思いがありますか。」
先生は続けたいと今は思っています。月並みですが、生徒の助けになれた時はやつて良かったな

—「終わらない遊戯」という今回の展示名にはどのような意味があるのでしょうか。
遊ぶことはやめないぞ、という意味が込められています。私にとつて絵を描くということは、小さい頃にチラシの裏に描いていたものとそんなに意味合いは変わらないくて。原点であるお絵かき遊びを楽しんでいた気持ちを忘れずにいたいという所信表明でもあります。

2M+